

剣道試合の戦評にみられる比喩表現に関する研究

—「昭和天覧試合」に着目して—

幕田 熙（大阪教育大学）

1. 研究の背景及び目的

スポーツを記録することは、指導法、技術力の向上にとって重要である。記録されたものは、広く大衆に周知され、後世に語り伝えられていく。

今日、記録方法の一つとして映像が用いられるが、以前は主に文字や絵で残してきた。スポーツのパフォーマンスを文字化し、それをもとに運動を再現することは難しい。そこで臨場感を持たせ、読者に強烈な印象を与えるための工夫の一つに比喩表現がある。比喩表現とは、文章を脚色し、より印象を強く伝えるために、伝えたいことを別の事象に置き換えて説明するものである。これまで小説や近世剣術書の比喩表現の有効性や特徴について考察が行われているが、戦評に関する考察はみられない。そこで本研究では「昭和天覧試合」に焦点を当て、ここに用いられている比喩表現にどのような特徴があるのかを明らかにすることを目的とする。この「昭和天覧試合」は、昭和4年、9年、15年に開催され、当時の剣道界のみならず、スポーツ界に大きな影響を与え、詳細な試合記録も残されている。

2. 方法

文献『昭和天覧試合』にある昭和4年205試合、昭和9年134試合、昭和15年142試合から比喩表現を抽出し、『比喩表現辞典』（中村, 1977）をもとに比喩法と喩詞の種類で分類し、分析・考察を行う。

3. 結果と考察

表1) 比喩表現の抽出数、比喩法による分類結果

			直喩	隠喩	擬喩	活喩	張喩	声喩
昭和4年大会	抽出数	163	32	20	18	3	21	69
(79頁)	(1頁毎出現数)	2.06	19.6%	12.3%	11.0%	1.8%	12.9%	42.3%
昭和9年大会	抽出数	483	134	6	23	1	35	284
(171頁)	(1頁毎出現数)	2.82	27.7%	1.2%	4.8%	0.2%	7.2%	58.8%
昭和15年大会	抽出数	441	129	4	28	1	43	236
(263頁)	(1頁毎出現数)	1.68	29.3%	0.9%	6.3%	0.2%	9.8%	53.5%
全体	抽出数	1087	295	30	69	5	99	589
	(1頁毎出現数)	2.12	27.1%	2.8%	6.3%	0.5%	9.1%	54.2%

総抽出数は1087個、1頁毎抽出数は2.12個であり、昭和9年が2.82個で最も比喩表現を用いていた。比喩表現を中村(1977)の比喩法に基づき6分類すると「ジリジリ」「さつ」など擬音で表現する《声喩》(オノマトペ)が最も多く、次いで「弾丸の如く」「燃えるような情熱的な若さ」など例えるものと例えられるものの区別がはっきりする《直喩》が多く

みられた。また《隠喩》《活喩》は昭和4年に多くみられるが、他ではあまりみられない。

表2) 大会毎の喩詞の種類別分類結果

	軍事	製品	自然	動物	植物	人間	身体	精神	言語	社会	活動	状態
昭和4年大会	5	16	40	4	0	1	9	6	0	0	13	5
	3.1%	9.8%	24.5%	2.5%	0.0%	0.6%	5.5%	3.7%	0.0%	0.0%	8.0%	3.1%
昭和9年大会	11	31	91	29	8	2	21	4	0	1	9	3
	2.3%	6.4%	18.8%	6.0%	1.7%	0.4%	4.3%	0.8%	0.0%	0.2%	1.9%	0.6%
昭和15年大会	27	37	61	15	0	6	21	11	1	4	45	4
	6.1%	8.4%	13.8%	3.4%	0.0%	1.4%	4.8%	2.5%	0.2%	0.9%	10.2%	0.9%
全体	43	84	192	48	8	9	51	21	1	5	67	12
	4.0%	7.7%	17.7%	4.4%	0.7%	0.8%	4.7%	1.9%	0.1%	0.5%	6.2%	1.1%

たとえるものにあたる喩詞を中村(1977)の喩詞の13分類に基づき分類すると、全体的に「電光石火」「稲妻の如く」など《自然》が最も多く、なかでも「火の如く」「火の出るやうな」など「火」を用い気位や勢いを強調する喩詞が多い。「水と水の相攻めるやうな」「清澄水の如き」など静寂や落ち着いたさまを表す「水」もみられた。《自然》に含まれる喩詞は、昭和4年が「潮」「巖」など12種類、昭和9年は「浅間の山」「陽炎」など49種類、昭和15年が「瀧」「雲」など40種類と多岐にわたる。大会毎にみると、昭和4年は「稲妻」「疾風」「流星」など《自然》、昭和9年は「隼」など《動物》、昭和15年は「上から被せるやうに」など《活動》が多かった。さらに喩詞の13分類の中から「弾丸の如く」や「戦車の如く」などの《軍事》的な喩詞を抜き出すと、それぞれ3.1%、2.3%、6.1%と増加し、昭和4年では「弾丸」の1種類のみだったが、昭和9年では9種類に、昭和15年では23種類に広がり、戦評を通して軍拡化していく世相を知ることができる。

各大会での比喩法の出現状況をみると、準決勝戦、決勝戦では《声喩》が多いが、1回戦から準々決勝の序盤戦では《直喩》《隠喩》などさまざまな表現が現れている。情報の少ない序盤戦では何かにたとえることで読者の理解を促し、勝ち上がり、情報が積み重なってきた終盤戦では、何かに例えることよりも《声喩》によって臨場感のある記録がされている。

4. 結論

戦前の試合戦評には《声喩》《直喩》が多く用いられているが、執筆時代や試合状況によって用いられる比喩法や喩詞が変化することが明らかになった。